

男子大学生の性接待

～高額報酬につられて受けたバイトは
金持ちたちのお相手でした～

目次

■甘い罠.....	2
●特別な接客【開通式/凌辱/お注射】	18

※サンプル版です ●挿入あり ○挿入なし ■性描写なし

■甘い罠

(ようやく慣れてきたな……。足が痛い)

そんなことを思いながら、柊木景(ヒイラギケイ)はアルバイトを終えて私服に着替え、ロッカーを閉めた。

「ねえ、柊木くん。バイト、これ以上は増やせない？」

呼び止められて振り返ると、店長が神妙な面持ちでたたずんでいた。帰路へ向かおうとしていた足を止め、質問の意図を聞き返すと、どうやら紹介したい特別なバイトがあるのだという。

「知り合いが人数を集めてプライベートな会食をするんだけど、男手が足りなくてね。求人には載せていない、特別なやつなんだ。できれば身元がしっかりしていて、知り合いの紹介で人員を揃えたいらしくて」

店長がそっと提示してきた時給は、とんでもない額だった。

思わずその数字に固まっていると、店長は声を潜めて言った。

「ありとあらゆる権力者が集まる社交場なんだ。その分、いくつか厳しい決まり事や気をつけることはあるけれど、どうかな？」

「あの……これ、時給あってますか？」

「嘘だと思うだろ？俺も最初は桁一つ間違えてるかと思ったよ。でも向こうの主催者がさ、『品があって見栄えのいい子を探してくれ』って言ってきたから、真っ先に君の顔が浮かんでさ」

「……いや、それはないでしょ」

「謙遜しちゃって……君もお金が必要だろ？俺の顔を立てると思って、一度だけでいいから受けてくれ！頼む！」

（毎日のシフトで課題するのも大変だし……生活費もカツカツ……。この時給なら今月のシフトを半分に減らして、自由な時間が作れる。これってただの給仕だろ？違法なことをさせられるわけじゃないし……）

景は少しの躊躇のあと、店長の紹介するそのアルバイトを引き受けることにした。



吊り下げられた豪華なガラスのシャンデリアが、ホールを淡く照らしている。

床一面には上質な深紅のベルベットカーペットが敷き詰められ、円状の重厚なソファが点在していた。

ソファの脇に添えられたサイドテーブルには、客の好みに合わせた軽食や、見たこともない高級なボトルとグラスが整然と並んでいる。

もっと広いテーブルでコース料理が運ばれてきたり、立食ビュッフェのようなものを想像していた。だが、ここは違った。

いかにも金を持て余した男たちが、思い思いに穏やかにグラスを傾けながら、ビジネスや、あるいはもっと裏の、仄暗い話をしているような紳士の社交場だった。

景が身に纏うのは、白いシャツ。それ以外はネクタイからスラックス、靴に至るまで、すべてクラシカルな黒で統一された制服だ。

着替えの際、ホール責任者からさっそく注意を受けた。

「その前髪、鬱陶しいね。接客をするんだから、身なりには気を遣いなさい」

目にかかるくらいに伸ばしていた前髪をサイドへ流され、ハードワックスで固められる。

露わになった景の素顔を見た瞬間、責任者の男は息を呑んだように一瞬だけ動きを止めた。

すぐに取り繕ったものの、じっと景の顔を見つめながら、低い声で囁いた。

「ふむ……もし良かったら、今後も定期的にうちで働かないか？」

「……やってみてから決めます」

景は視線をそらし、淡々と答えた。

ホール責任者は30代前半ほどの男だ。黒髪をきっちりとオールバックにし、スクエアの眼鏡をかけた、いかにも神経質そうな佇まい。綺麗に目尻が上がった吊り目に整った顔立ちをしている。さらに、同じフロアにいる従業員たちも20代そこそこの若い男ばかりだった。皆、系統こそ違えど、モデルのように整った容姿をしている。

顔合わせの際、彼らからはやけに歓迎され、フレンドリーに接せられた。

会場は、都内でも有数の高級ホテルの最上階で、

スタッフであっても厳重な持ち物検査があり、携帯電話すら持ち込みを禁じられた。

教えられた基本の配置場所で、置物のように控えていると、一人の男に手招きをされる。

周囲を見渡しても、待機している従業員は景しかいない。

景は静かに呼吸を整え、男の元へと歩み寄った。

年齢は40代半ば。自分の父親と同じくらいの年だろうか。

よく陽に焼けた筋肉質の褐色肌で、ソファに深く腰掛けているにもかかわらず、高身長であることが一目でわかる体軀をしていた。

景は男の正面に辿り着くと、すっと片膝を床についた。

この仕事の決まり事の一つだ。

客の前では膝をつき、上目遣いにオーダーを乞う姿勢を求められる。見下ろす実業家の視線は注文を選ぶフリをして、跪いた景の首筋や腰のラインを舐めるように品定めていた。

注文を受け、さっさと踵を返そうとするが、男は立て続けに口を開いた。

「君、見ない顔だね。いつから入ったの？」

「……本日が、初めてでございます」

「そう。じゃあ、お酒は君が持ってきてくれ」

「……はい？……かしこまりました」

足のつま先から頭のとっぺんまで、ねっとりとした視線を向けられ、胸の奥からせり上がる、不快な嫌悪感をどうにか押し殺す。身なりは一流の紳士だが、絶対に一筋縄ではいかない、厄介そうな人物だ。それが景の直感だった。

しかも、男が迷わずオーダーしたのは、メニューの中でも最も高額な、一本数百万は下らないヴィンテージボトルだった。

（……本物の金持ちだ）

落とせば一発で人生が吹き飛ぶような数百万のボトルを運ぶのだ。緊張しないわけがない。

事前にホール責任者から「ボトルを落としたら、たとえ故意ではなくても全額弁償だからね」と脅されていたため、盆を持つ指先に余計な力が入ってしまう。

どうにか無事に客の元へ辿り着くと、男は満足そうに、にこやかな笑みを景に向けた。

失礼のないよう、事前に頭に叩き込んだマニュアル通りの完璧な所作でローテーブルにボトルを置き、どうにか一仕事を終える。

安堵の息を吐き、踵を返そうとした瞬間、またしても、男の低く甘い声が景を呼び止めた。

「ねえ。ボトル、開けてくれない？」

男は、自分が座っている革製ソファの、すぐ隣をぽんぽんと軽く叩いた。ここに座って、酌をしろ。そう促しているのだ。

「申し訳ございません。私……は、まだお酒の扱える年齢ではなく、そういった接客は致しかねます。代わりに他の者を呼びますが、いかがでしょうか」

「君、まだ二十歳になってないの？」

男の目が、ずっと細められた。獲物を見る猛獣のそれだ。

「……はい。ですので、その……」

「あはは、ごめんね。無理を言って」

「……とんでもございません」

男はにやにやとした、底の知れない笑みを浮かべたまま、それ以上は追及せずにあっさりと引き下がった。

一難は去った。だが、景の背中には、冷たい汗が伝っていた。

引き下がった男の様子に、どうしても拭いきれない違和感があったのだ。

その粘りつくような視線の余韻が、いつまでも景の肌にまとわりついて離れなかった。

それからも立て続けに、景はいくつかのテーブルに呼ばれては次々とオーダーを通し、配膳をこなした。

その度に、当然のように隣に座れと男たちから要求されたが、景はすべて「まだお酒を扱える年齢ではございませんので」とかわし続けた。

だが、嫌でも周囲の状況が目に入る。

見渡せば、先輩のウェ이터たちは当たり前のように客の隣に腰掛け、ボトルを開け、酒をグラスに注いでいた。

それどころか、明らかに給仕以上の接待を強いられている。

それはまるで、男しかいない淫らな高級クラブのようだった。

肥満体の客の手が、ウェ이터の尻をスラックス越しに揉みしだく。

「……っ、ん、あ……っ」

「いい尻してるねえ。なあ、もっと奥まで触ってほしいか？
ん？」

「はい……っ、もっと……触ってください……♡」

熱を含んだ喘ぎ声と、下品に嗤う男の低音が、店内の音楽に混じって耳にこびりつく。

景は内心ぎょっとしたが、それを一切表情に出さないよう、必死に無表情を装う。

誰も何も言わない。当の先輩たちが一切の抵抗もせず、
それどころか自ら媚を売るように、男たちの身体にぴたりと身を寄せていた。

「ほら、追加のボトル持ってこいよ。今夜はたっぷり可愛がってやるからよ」

「はい、すぐに……っ♡今夜は、離さないでくださいね♡」

男は乱れたシャツの胸元に札束をねじ込むと、ウェイターはふらつく足でその場を後にした。

景は胃の奥がせり上がるような、なんとも言えないおぞましい気分にさせられていた。

それから数十分が経った頃、ホール責任者の眼鏡の男が早足で駆け寄ってきて、景の耳元でそっと囁いた。

「えっ……、あのお客さんですか？……ですが、私は……」

「ああ、あのお客様が強く君を希望されているんだ。いいか、お客様の要望はできる限り叶えなさい」

「えっ？でも、お酌などにはできないと」

「酒は注がなくもいい。ただ隣に座るだけだ。余計なことは何もしなくていいから、ほら、さっさと行ってこい。あの人はうちの最上級のお得意様だぞ。絶対に失礼のないようにしろ」

気味が悪いという感情が胸を支配したが、指名されている以上、行かないわけにはいかなかった。他のスタッフに代理を頼めるような空気でもない。景は仕方なく、重い足取りであの客の元へと向かった。

「ああ、よく来てくれたね。さあ、座って、座って」

男は、気さくな口調で話しかけてきた。

陽に焼けた褐色肌のせいで、笑ったときに覗く真っ白な歯がやけに爽やかに見えて、それがかえって胡散臭い。

「あの……申し上げておきますが、お酌などの接客はできませんので」

「そういう堅苦しいのはいいからさ。君みたいな若くて可愛い子が隣に座ってくれるだけで、酒が美味くなると思ってね。本当に、ただ隣にいてくれるだけでいいんだよ」

「……？はあ……」

「これも仕事のうちだよ。君の先輩たちもそうしていただろう？君は何もしなくていいから」

座るだけ。何もしなくていい。不審に思った瞬間だった。

男の大きな手が、するりと脇腹を撫でさすった。手のひらはそのまま滑り落ち、腰へと到達する。

「……っ、あの」

「ん？なあに？」

抱き寄せるような、強引で力強い手付きで引き寄せられ、腰をがっしりと掴まれる。景は全身の筋肉を強張らせた。

「もしかして、緊張してる？」

「緊張……とか、そういうんじゃないくて」

「綺麗な肌だなあ。吹き出物一つないじゃないか。洗顔は何を使っているのかな？」

男の指先が、景の頬を必要以上にねっとりと撫で回す。至近距離から注がれる、品定めするような、舐め回すような視線。

そこから逃れるように、景は必死に視線をずらした。

（まだ、何もされていない。これはただのスキンシップだ）

自分に言い聞かせながら、なんとか返答の言葉を絞り出す。

「そんな……特別なことはしていませんが」

「ええっ、本当？ やっぱ若いからかなあ。それにしても……いい匂いだ」

男の指が景の癖のない艶やかな黒髪に触れ、それをゆっくりと耳にかけた。

直後、ぴちゃりと濡れた感触がして、耳たぶを舐めとられる。

「っ……！」

景は凄まじい嫌悪感に襲われ、ぞわぞわと全身が震え上がった。

男が言葉を発するたびに、アルコール特有のツンとした臭いが熱い吐息とともに頬を撫で、思わず吐き気がこみ上げる。

息をしたくない。この場の空気を一吸いも吸いたくない。

温度の異常に高い指先が、再び景の頬を包み込む。

身をすくませる景に対し、男はどうしたのかと楽しむように、必要以上に身体を触り、いやらしい笑みを浮かべ顔を覗き込んできた。

無意識の動作なのか、それとも故意なのか。まだ服を脱がされたわけでもない。

ここで大騒ぎして拒否するのは、自分の自意識過剰で、男自身はそんなつもりはないのかもしれない、そんな思考が頭の中でぐるぐると回る。しかし、どす黒い不快感が限界まで蓄積されていく。

「大学生かあ……若いなあ」

低く呟いた男の顔が、唇が触れ合うほどの至近距離まで迫った。

グイと顎を持ち上げられ、強引に唇を奪われそうになったその瞬間、景の理性が弾けた。

「やめろ！」

反射的に、男の厚い胸板を両手で力強く突き押した。不意を突かれた男の身体が大きく傾き、そのままローテーブルへと衝突する。

パリンッ！！

耳を刺す高い破碎音が静寂のホールに響いた。

数百万のボトルが派手に碎け散り、中から溢れ出した琥珀色の液体が、上質なカーペットを汚していく。

気づけば、会場中の視線が静まり返り、一斉に景へと注がれていた。

高い酒を台無しにしたとか、弁償がどうか、今の景にはどうでもよかった。

ただ目の前の男が不快で、そしてここが正真正銘のとんでもない異常な場所であることに、ようやく気づいたのだ。

しかし、時すでに遅く、いつの間に背後に回っていたのか、景の周囲を屈強な黒ずくめの男たち数人が囲んでいた。

男たちは一言も発さず、景の両腕を背後にひねり上げ、床へと組み伏せた。

「……っく、放せっ！放せ！」

「おお、活きがいいことだ。あーあ、もう駄目だなこれ。このお酒、いくらするか聞いていただろう？」

床に組み敷かれた景を、褐色肌の男がソファから冷ややかに見下ろした。

「そんなこと、どうでもいい……！帰るっ、離せ！」

「困るのは君のほうだろう？どうやって弁償するの、ねえ？柊木景くん」

男が顎をしゃくると、景を押さえつけていた男たちの手が伸びた。

ぶちぶちぶちっ！！と、力任せに衣服が引き裂かれる音が響く。

白いシャツのボタンがあちこちへ弾け飛び、床を転がっていく。無残に破り取られた布地の隙間から、普段は服に隠されて陽に焼けていない、陶器のように滑らかで白い、若い素肌が露わになった。

●特別な接客【開通式/凌辱/お注射】

「やめろ！触るな、離せっ……むぐっ、ンううううっ！！」

声を上げようとした口元を、男のごつごつとした分厚い手で乱暴に塞がれる。数人がかりで身動きを封じられた。

その時、ちくりと二の腕に鋭い痛みが走る。

視線だけをどうにか動かすと、案の定、景の腕には細い注射針が突き刺さっていた。シリンジの中の液体は、すでにすべて景の体内へと注入された後なのか、一滴も残っておらず、針がゆっくりと引き抜かれた。

(何だ？今、何をされた？)

困惑と恐怖が脳裏を過った直後、異様なほどの強烈な倦怠感が、景の身体を襲った。

「あ、……あ、え……？」

拘束していた男たちの手が不意に離されたが、もう立ち上がることすらできなかった。

四肢の先から急速に力が抜け、指一本動かせない。

身体がまるで鉛のように重たく沈み込み、それとは裏腹に、胸の中ではどくどくと心臓が早いリズムを刻み始めていた。

体内が内側からじわじわと熱くなっていく。

呆然とする景の、剥き出しになった胸元へ、あの褐色の男の手がするりと滑り込んできた。

「ひうっ……！」

景の身体は、電気を流されたように過剰に跳ね上がり、ビクンビクンと激しく震え出した。

「っひ……？ あ、……あ……や、あっ、あ……っ」

呂律が回らない。視界は急激に狭まり、霧がかかったように白くぼやけている。

天井に吊るされたシャンデリアの豪華な光が酷く眩しく、網膜を刺すような刺激に、景は思わずきつく目を細めた。

男の大きな手がスラックスのジッパーを引き下げ、下着ごと強引に剥ぎ取っていく。

「や、え、お……っ」

布地が肌を滑るだけのわずかな摩擦ですら、神経が過敏になった今の景には刺激となって全身を駆け巡り、身震いした。

あっという間にすべての衣服が取り払われ、必死に性器や胸元を隠したくとも、手足に力が入らない。

なす術もなくすべてを曝け出された状態で、革のソファへと横たえられていた。

こつこつとホールの静寂に響く、小気味のいい複数の革靴の足音。景はぎくりと、身体を強張らせた。

一人どころではない。複数の、それも大勢の足音が近づいてくる。

「さっきすごい音がしたけど、喧嘩かい？」

「新しい子が来ると、何かしらトラブルが起こるから退屈しなくていいよねえ」

「へえ……可愛いじゃん。真面目そうだけど、案外反抗的なだね」

頭上から、ねっとりとした無数の視線が一斉に景の裸体へと集中する。若く瑞々しい青年の肢体に、周囲から「ほう……」と値踏みするような下卑た声がため息混じりに上がった。

「おっ、いいなあ。くっそ、俺が先に見つけて指名してりゃよかった」

「先買ったのは私だからね。ルール通り、まずは私が美味しくいただくよ」

「まあ、それがこの絶対の掟だからね。仕方がない。観客として楽しませてもらうよ」

「おい、そこの、そいつの足を押さえてろ」

男が顎をしゃくると、先ほど景を拘束した大柄な男の一人が無言で歩み寄ってきた。

男は景の身体を無理やり抱き起こすと、その両膝の裏に腕を差し込み、がっしりと抱え上げてM字の形に大きく割って開かせた。

「な、……ひっ、や……はな、ひえ……っ」

薬のせいで回らない舌が、情けない悲鳴しか紡いでくれない。無防備に晒された姿を自覚し、景の瞳に動揺と屈辱が走る。

その瞬間、周囲のギャラリーから下俗な歓声が湧き上がる。

「身体が柔らかいな。可愛い蕾が丸見えだ」

「初物だろ。傷一つなくて綺麗なもんだ」

剥き出しにされた、ひくひくと怯える秘口を舐め回すように、粘着質な熱を帯びて注がれる不埒な視線の数々。

興奮を隠そうともしない観客たちの下品なガヤに、景は底知れない羞恥と恐怖でぶるぶると全身を震わせた。

「あ、あ、ら……へっ、い、う……あっ……！」

『離せ』『見るな』『助けてくれ』

叫びたい言葉は山ほどあるのに、喉の奥から這い出てくるのは、子供のように舌の回らない、情けない甘えたような声だった。

「ずいぶんと舌足らずだけど、初手から『アレ』打ったの？」

オーディエンスは一体何人いるのだろう。

ぼやけた頭では正確な人数など把握できない。

ただ、複数人の金持ちたちに囲まれ、まるで市場のマグロの解体ショーのように、己の身体を興味深そうに見下ろされていることだけは理解できた。

男は傍らにあったボトルを傾けると、景の平らな下腹部へ、ひんやりとした透明な粘液をたっぷりと垂らした。

突然肌をすべる冷たさに、景は小さく身を振る。

だが、それを広げるようにして、男の節くれ立った指先が、剥き出しの肌を嫌らしく這いずり回る。

「ひうっ、……あ！」

やがて指先は、固く閉ざされた窄まりへと到達した。

躊躇なく、一本の指がぐじゅりと挿入され、浅めに出し入れを繰り返す。

くぼっ、くぼっ、くぼっ……♡

「ひいいっ……やえっ……」

経験したことのない異物感に身をすくめるが、皮膚が擦れ合う卑猥な粘着音が耳に届き、景の頭をどうしてもなく不快にさせた。

ぬぐっ、ぬぐうっ、ぬちゅ♡ぬちゅぬちゅぬちゅぬ
ちゅっっっ……♡

男はさらに指を二本、三本と増やしていく。狭い窄まりの中で、指が蠢くたびに、溶けたローションが溢れ出した。

ぬっちゅ、ぬっちゅ、ぬっちゅ、じゅぷ、じゅぷっ♡じゅ
くうっ……♡

「あ、ひっ、あ……んう、うあ……っ、や、あっ」

耳を塞ぎたくなるような、淫らな音が激しくホールに響き渡る。

男の指先は景のナカを這い回り、弱点を探り当てるように敏感な粘膜を意地悪く擦り上げる。

そして、指の腹がある特定の一点を強く突き上げた。

その瞬間、脳天を直撃するような、びりびりとした未体験の閃光が全身を駆け抜けた。

「ふ、あ……あう、っ……?! ン、んああっ……っ!」

「前立腺っていうんだよ、ここ。すごいだろう、身体が跳ね上がっている」

とん、とん、と小突かれ、さらにぐりぐり、と肉の壁を抉られる。

「ひ、……やえ、アっ、あアあっ……！」

首を横に振り、必死に拒絶の言葉を紡ごうとするものの、弱点をダイレクトに抉られた衝撃に景の腰がガクガクと勝手に浮き上がってしまう。

ぬぱっと、ローションに塗れた指が引き抜かれ、余韻にハアハアと激しい呼吸を繰り返す景の目の前で、男が己のジッパーを降ろし、凶暴な下半身を露出させた。

赤黒く太い血管がびきびきと浮き立ち、怒張した男の欲棒が、景の濡れた入り口へと直に擦り付けられる。

「ひっ……、やあ……っ」

景は顔を激しく左右に振り、必死で拒否を示した。

舌は未だに満足に回らないが、少しずつ薬の強制的な麻痺が薄れてきたのか、手足に微かな感覚が戻ってくる。

景は必死になって、身を振ったが、屈強な男たちに押さえつけられた状態では、それは幼児の戯れほどの抵抗にもならなかった。

「や、っ、やらあっ……！あっ」

ぬるっ、ぬるっ、と、入り口を焦らすように先端で弄ばれるたびに、景の身体は怯えたようにビクビクと跳ねてしまう。

それが情けなくて、悔しくて、涙が止まらない。

男は景の腰をがっしりと両手で掴み、嫌らしく笑った。

熱く肥大した亀頭が、じゅぶ、とぬかるみに埋まる。

そこからは、一切の慈悲もなかった。男の獣のような欲棒が、景の無垢で狭い秘処を一気に貫いた。

グブッ、ズグウウツツツ！！

「ひぐうっっ？！？！」

身体の奥底を引き裂かれるような、鋭い痛みが走り、熱に浮かされた景の目尻からぽろぽろと大粒の涙が零れ落ちた。

無理やり持ち上げられた両足の隙間から、繋がっている光景が嫌でも視界に入る。

男の欲棒が、景の薄い下腹部を内側から突き上げ、肉を押し広げていく。

【続きは製品版をお楽しみください】